

千姫：姫路での平和で幸福な時代

姫と船長

大阪城が落ち彼女の最初の夫の死後、千姫(1597－1666)はしばらく徳川幕府(1603-1868)の首都である江戸(東京)へ戻った。彼女はその旅の一部を本多忠刻(1596－1626)という名のハンサムな若い船長が率いる輸送船団に乗っていた。伝わる話によれば、彼女が次の夫となるこの男に初めて会ったのはこの航海の時だった。千姫の愛の生活は多くの装飾の下にあった。話のもう一つの糸口：大阪城から彼女を救い出した侍の坂崎直盛(?－1616)は、報償として彼女と結婚することを約束されていた。しかし千姫は彼を拒んだ。伝えられるところによると彼はその救出劇の際に負った火傷のため醜くなっていたからだ。侮辱を受けた坂崎は、忠刻との結婚の日に姫を誘拐することにした。しかし彼の計画は幕府に発覚し、幕府は彼の土地を取り囲む兵隊を送った。この(おそらく作り話)話のバージョンによって異なるのだが、坂崎は自殺かあるいは自分の部下の裏切りのどちらかで死んだ。

結婚、そして母親として

どこで聞いても千姫と忠刻は幸せな夫婦であった。千姫はまもなく二人の子供を産んだ。娘の勝(1618－1678)と息子の幸千代(1619－1621)であった。1619年の幸千代の誕生を祝う詩は、航海に関する用語を用いて、千姫と忠刻の初めての出会いを示唆しており、本多家の嫡男誕生に対する喜びを物語っている。千姫にとって姫路でのこれらの歳月が不幸で刻まれた人生の中で幸せな合間であった。

忠刻の祖父である本多忠刻(本多平八郎とも呼ばれた：1596－1626)の肖像画がある屏風

千姫と忠刻の出会いを描いたと思われる 17 世紀のついたて

千姫の肖像画

幸千代の生まれた年に詠まれた詩のために作られた「船」を主題とする一連の詩(連歌)